

## 15 岩手県金ヶ崎町（城内諏訪小路重要伝統的建造物群保存地区）より 輩出せる明治女医2名

福嶋 正和

千葉市桜木園

日本医史学雑誌第54巻第3号に掲載された「明治女医の基礎資料」（三崎裕子著）によると、明治時代に医師登録された女医は239名とされ、その名簿のNo.182 曾根（相沢）ミサホとNo.214 志賀ミエは岩手県胆沢郡金ヶ崎町の同郷（同じ町内会）である。

曾根（相沢）ミサホは牧師の家庭で明治18年生まれ。金ヶ崎小学校、尚綱女学校（仙台）を経て明治39年に同志社高等科を卒業した。明治37年に偶々米国の富豪が日本観光中に京都でその息子が腸チフスに罹患したが、医師・看護師の献身的な医療・看護で一命を取り留め帰国した。その感謝として看護学志望の人を渡米させたいと伝えてきて園部まきを派遣したが、優秀な成績を修めた。そのため今度は米国で医師の教育を受けさせたい（費用全額負担で）ので医学志望の女性二人を紹介するよう伝えてきた。そこで推薦されたのが相沢ミサホと中川モト（兵庫県出身）であった。明治39年8月に渡米し、9月ペンシルバニア女子医大入学し、明治43年同学卒、ペンシルバニア病院婦人科「6週間講義」を受けた。同年6月に帰国し、同年に医籍登録し、同志社博愛病院に勤務した。明治44年東京千駄ヶ谷で開業したが、同年に結婚し、夫の勤務の関係により、東京、八戸、福岡の各地を転じた。福岡では日赤が巡回診療所を開設するに当たり、大正9年日赤福岡支部巡回診療班医師に彼女を任命したとある。昭和16年に脳出血で倒れた夫の介護のために辞任し、久留米市で開業したという。彼女は熱心なクリスチャンであり、愛と奉仕の精神で医療に当たり慈母のように多くの人々に慕われた。昭和44年5月6日に他界（享年84歳）。

志賀ミエは明治13年生まれ。士族の出で士族没落により「武士に商法」の通り窮貧の幼少時代を過ごした。父親はわが子には専門的技能を付けさせることが重要と考え、ミエを医師にさせるべく私立岩手医学校（現県立岩手医科大学）に入学させた。しかし、1年後に上京し、女子医学研修所、私立東京医学校、日本医学専門学校等で医術の研鑽に努めた。明治37年に前期医術開業試験に合格したが、後期試験には3回失敗し、明治42年（官報では明治44年）に30歳でようやく合格し、医籍登録となった。その間に結婚し、長女美子を出産し、貧困と闘いながら育児と勉学とを両立させていった。大正元年に見ず知らずの宇都宮に内科小児科医院を開業したが、当初は患者皆無の有様であったという。しかし、ミエは持ち前の負けん気を発揮し、深夜でも往診に出かける献身的な努力が実を結び、門前市をなすようになったという。ミエの熱意と適確な診断が評判となり、宇都宮第1高女の校医や宇都宮看護婦学校の教師を兼務して地域医療に尽くしていった。一方、プライベートでは一人娘美子も医師になったが、34歳で他界するという悲劇に遭い孫を引き取り医業の傍らその養育に当たったという。昭和23年（70歳）に医業を廃業し、余生を送っていたが、昭和45年11月（91歳）に地域医療への貢献が認められ、賜杯（銀盃）の榮譽に浴したことに感激に浸った。昭和48年に他界（享年94歳）。

この2人の明治女医が同郷の出身であることについて胆江日々新聞誌の論評では、「こうした人材が育ったのは金ヶ崎町の人々のバイタリティーと教育熱心な風土によるものだろう。物を作り、残すこと以上に人を作り、育てること、すなわち“教育の重さ”を証明しているようだ」となっている。

演者は偶然に文化座公演「ほにほに、おなご医者」を観賞する機会があり、志賀ミエと金ヶ崎町を、更に三崎裕子氏の論文を拝読して曾根ミサホを知ったに過ぎないが、二人の時代的・地域的背景を考察したい。